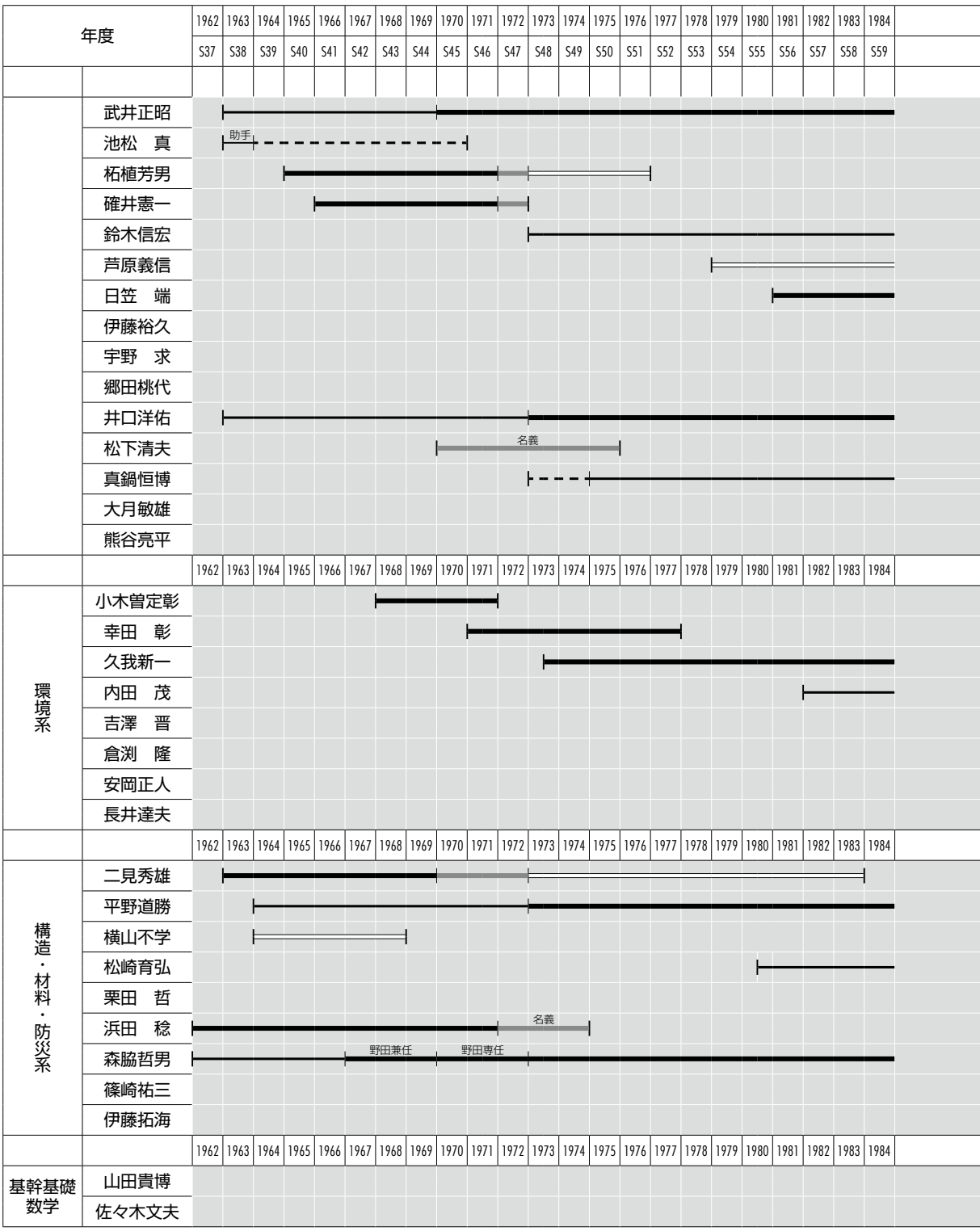
第2章

建築学科の各種変遷

2–1. 人事構成の変遷

一・二部建築学科に在籍した教職員を年表（グラフ）で表わす。着任・退任時期や職階は、基本的には人事課データと、法人で発行していた職員名簿に拠る。ただし複数の資料の相互不一致や年度による記載形式の差異など、正確さは必ずしも保証できない。年度途中の交替は、一律に年度中間で表示した。なお、餞人事も複数例あったが、ここには反映していない。

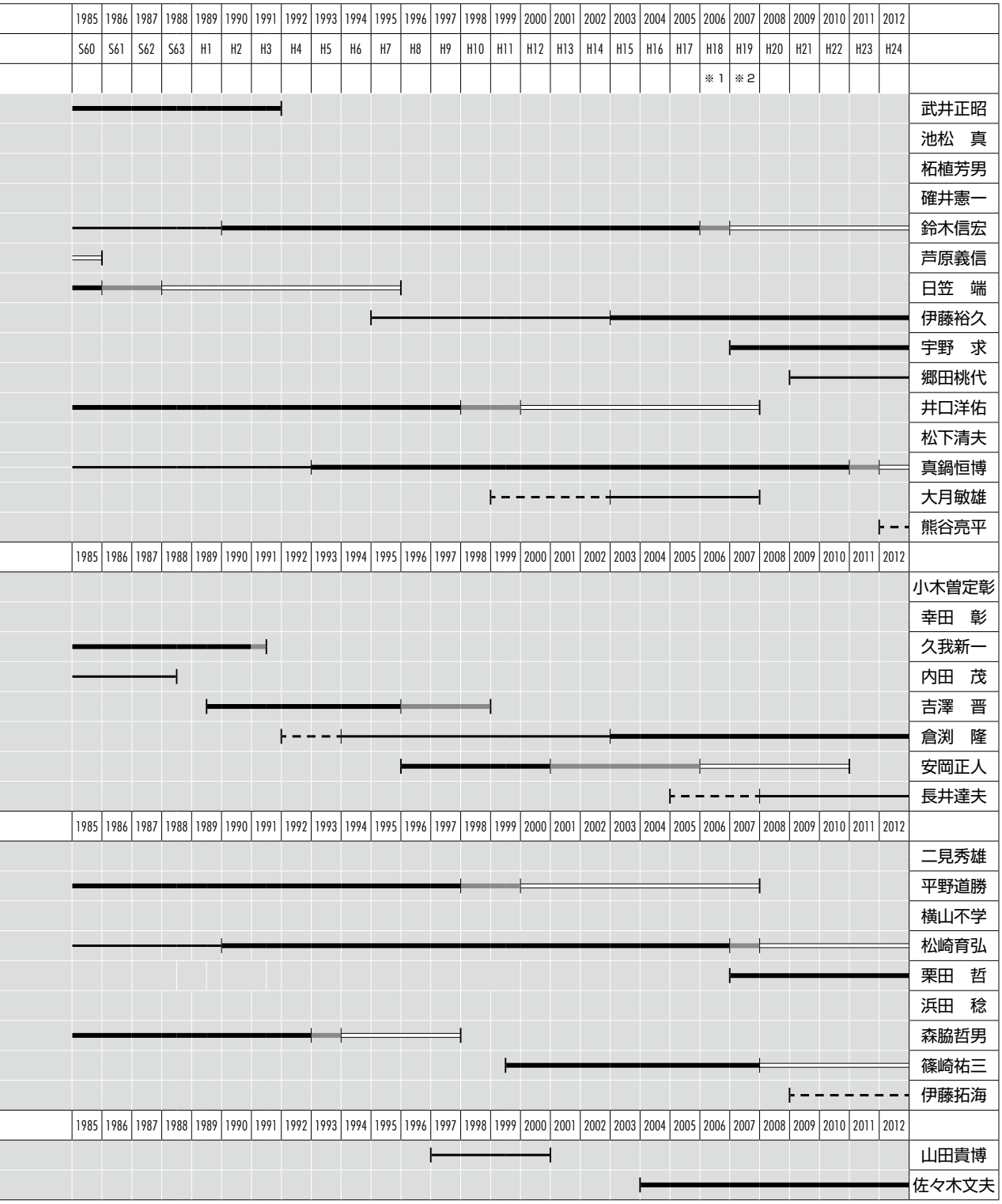


1）第一部　講師以上

原則的に研究室が存在した教員を対象としたが、名義専任や非常勤扱い嘱託教授だけで終わった場合でも一部は掲載した。着任前や辞任後に非常勤講師を務めたケースは省略した。

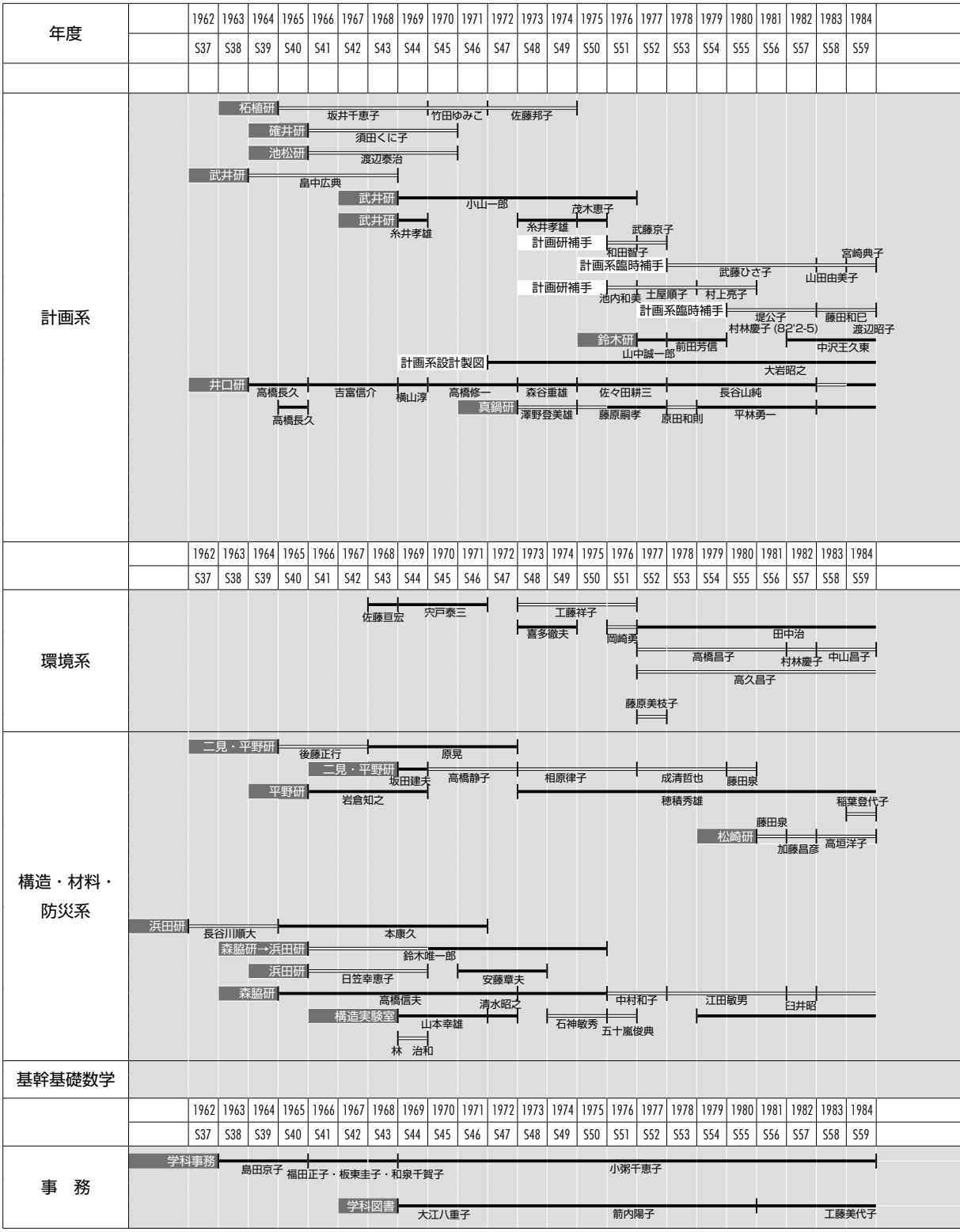
凡例
- 専任教授
- 嘱託教授（専任）
- 嘱託教授（非常勤）
- 助教授・准教授（2007～）
- 講師（専任）

※１　九段校舎へ
※２　職任名変更　助教授→准教授
　　助手→助教



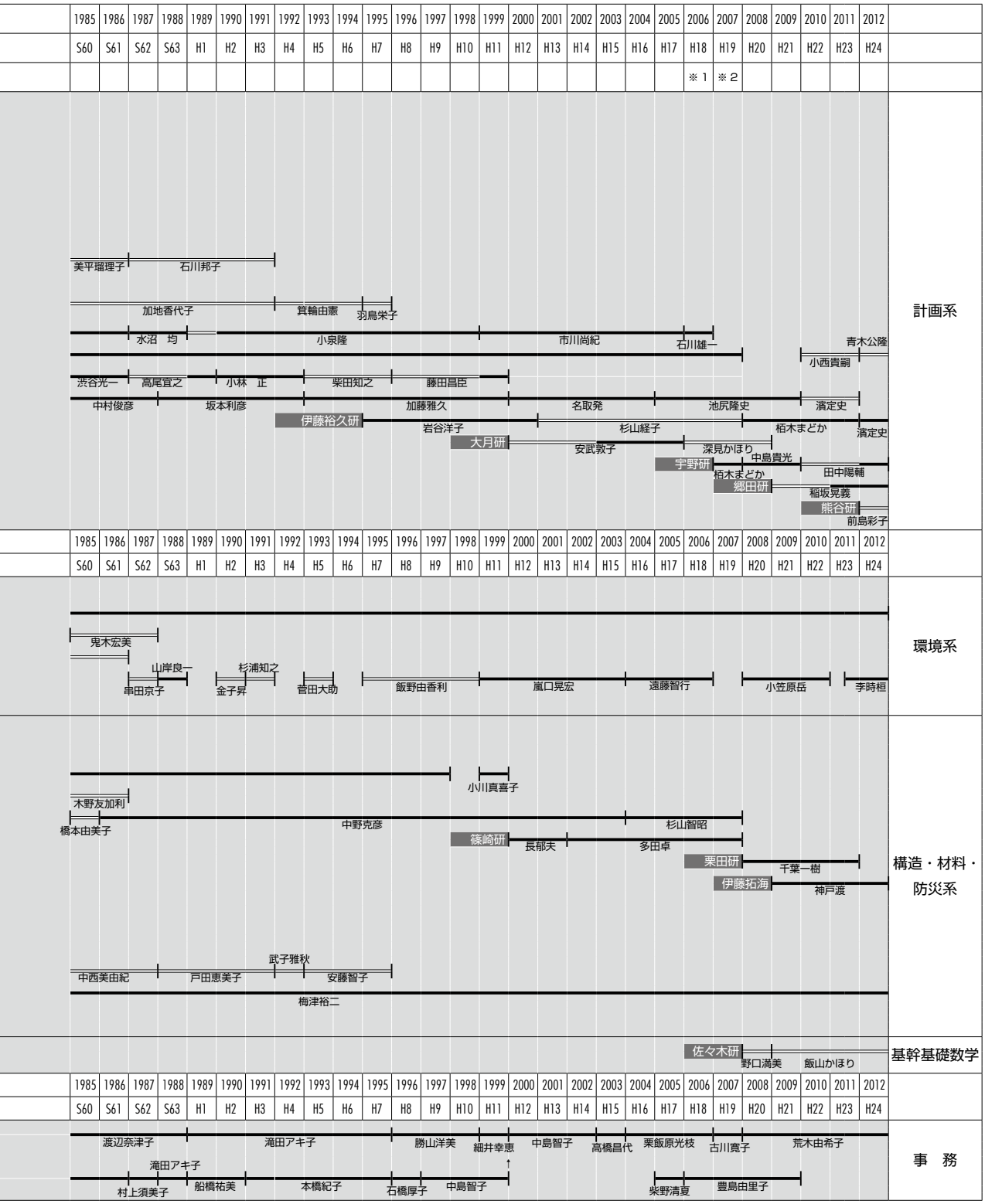
2）第一部　助手・助教、補手、事務職員

助手（助教）・補手・事務職員は交代が頻繁なため、全てが解明できた訳ではない。補手の専任・嘱託・臨時の区別は省略した。前任・後任の関係も厳密なものではない。



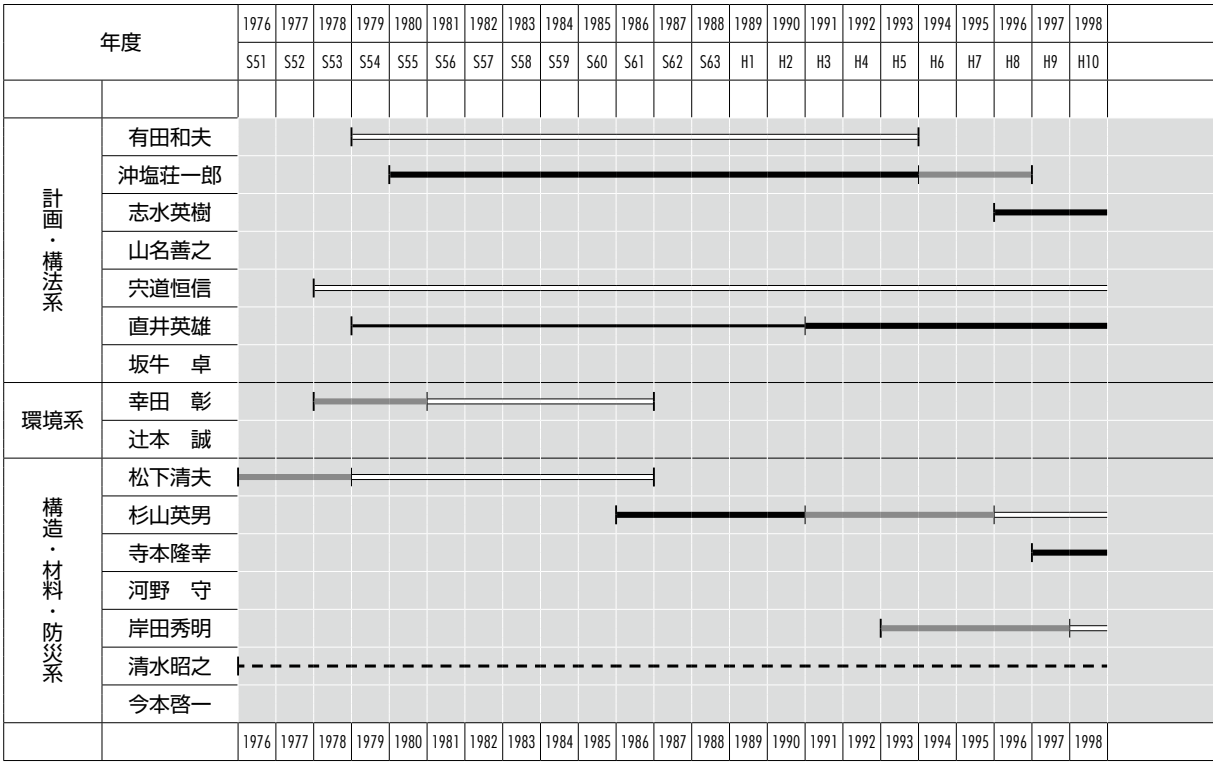
※１　九段校舎へ
※２　職任名変更　助教授→准教授
　　助手→助教

凡例
助教・助手
補手
●●



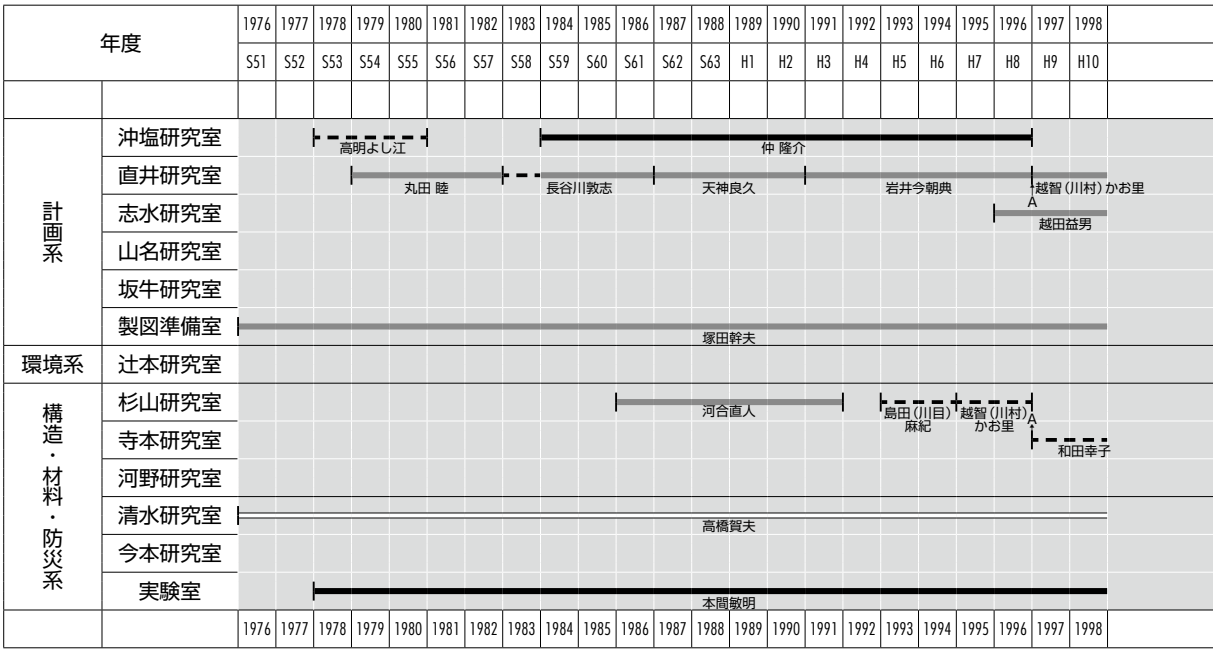
3）第二部　講師以上

第二部は年数・人数が少ないので、第一部よりは変遷を追いやすい面があるが、学科の公式見解と名簿掲載内容が必ずしも一致している訳ではない。

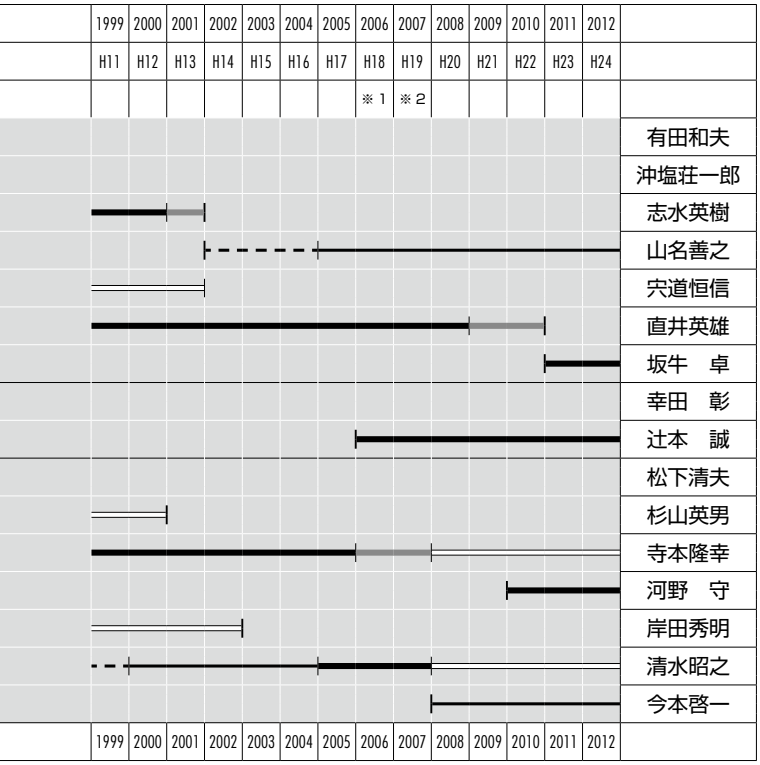


4）第二部　助手・助教、補手

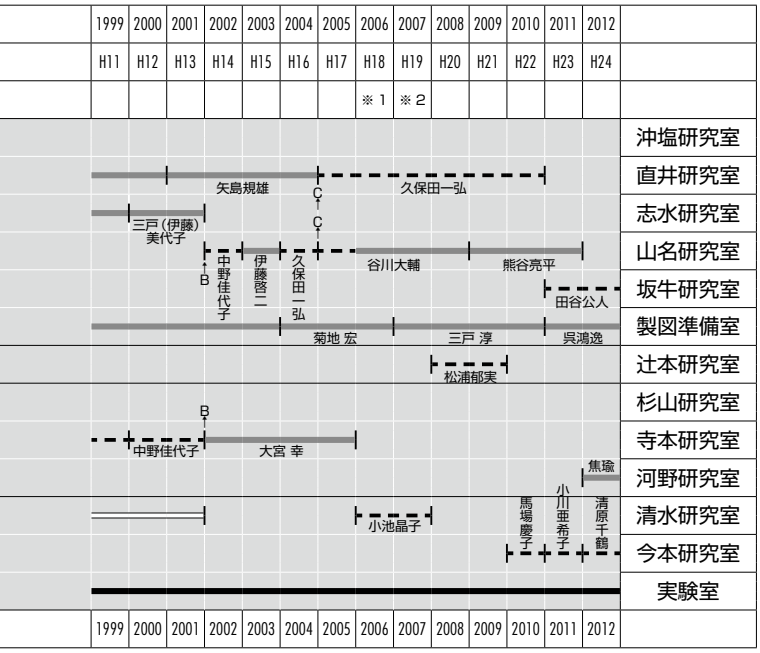
第一部同様、交代や研究室移動も頻繁であり、同様にすべてを正確に把握できた保証はない。



※１　九段校舎へ
※２　職任名変更　助教授→准教授
　　助手→助教



凡例
- 専任教授
- 嘱託教授（専任）
- 嘱託教授（非常勤）
- 助教授・准教授（2007～）
- 講師（専任）



凡例
- 専任助手（助教）
- 嘱託助手（助教）
- 専任補手
- 嘱託補手

2-2. 建築学科施設の変遷

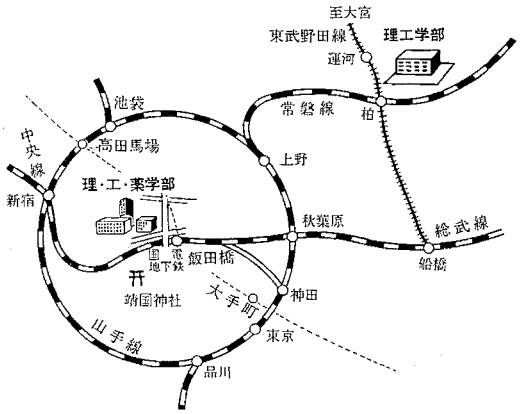
工学部（一・二部）の学科専用スペース（研究室・製図室・実験室・図書室・学科事務室など）の変遷の概略を、略図とともに纏めておく。建築学科専用部分以外についても、関連する主要な変遷については一部を記載する。このほかに他学科との共用部分だが主に建築学科で使用した教室（神楽坂 951、九段 KN501）がある。

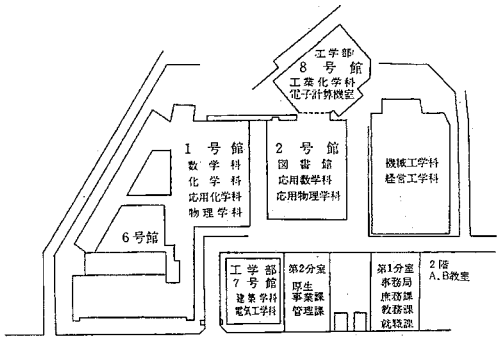
出典は、毎年発行されている入学案内に掲載されたキャンパス案内図（九段校舎は避難経路案内図）であるが、欠落している年度もあるので、本文にある施設関係の記述を網羅するものではない。入学案内の発行時期から判断して、表示されている年度の前年度の状態を表わすものと解釈した。また、あくまで概略の配置を表わした（正確な平面図からは程遠い）ものであり、通路・改段、研究室内部区画等、平面形状・寸法はかなり不正確である。

なお、文中の「A 科」は建築学科、「E 科」は電気工学科、「i 科」は経営工学科の略称。また、面積表は省略した。

1）初期の神楽坂・薬学校舎

「入学案内」に掲載された交通案内図と、神楽坂校舎・薬学校舎配置図（1969/ 昭和 44 年・1973/ 昭和 48 年度版より）。



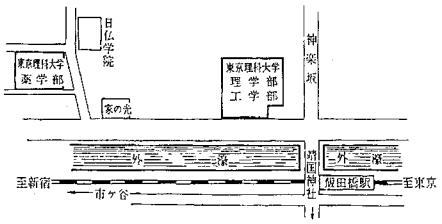


東 京 理 科 大 学

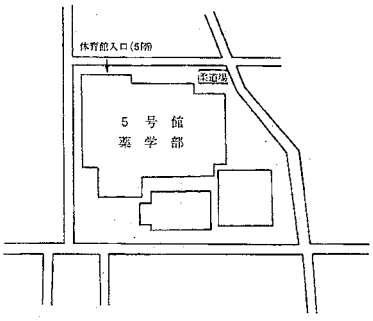
理 学 部・工 学 部
東京都新宿区神楽坂 1 ノ 3
電話　東京（260）4271（代）

理工学部
千 葉 県 野 田 市 山 崎 東 亀 山
電話　野田 0471（22）1501

薬 学 部
東京都新宿区市ケ谷船河原町12
電話　東京（260）6725・9566



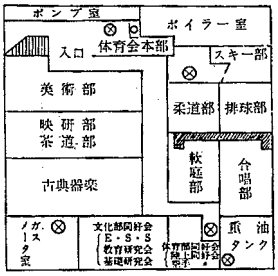
全体像



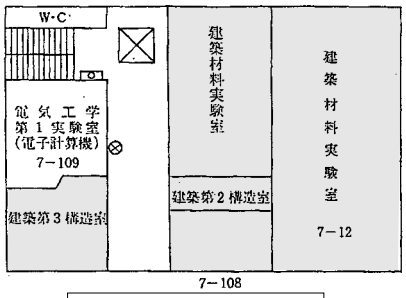
校舎平面図

2）7号館へ（1968/ 昭和 43 年度）

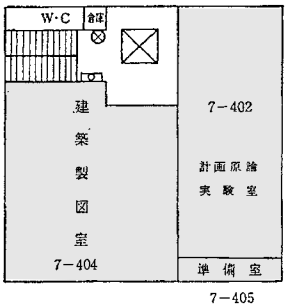
建築学科は新築された７号館に居を構えた。当初､地階は事務（教務課）が使っていた。１階は別棟を含めて実験室となり、電気工学科と建築学科で使用し、上階は４・５・８（一部）・９階を建築学科が使用した。



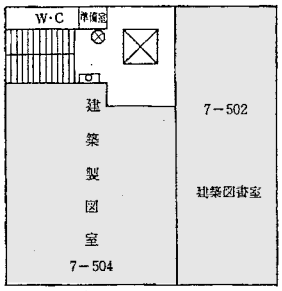
７号館　地階



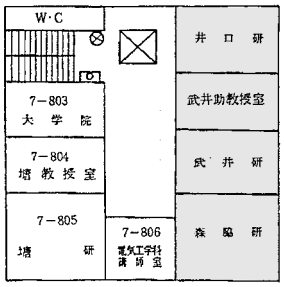
７号館　１階



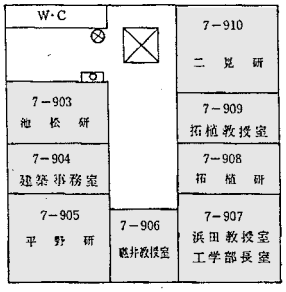
７号館　４階



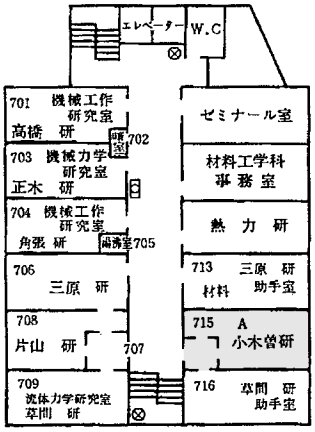
７号館　５階



７号館　８階



７号館　９階

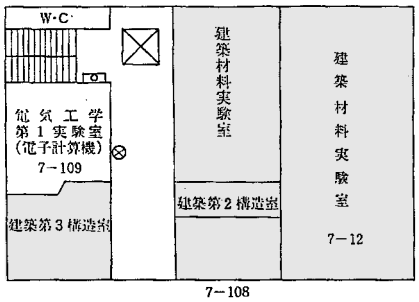


３号館　７階

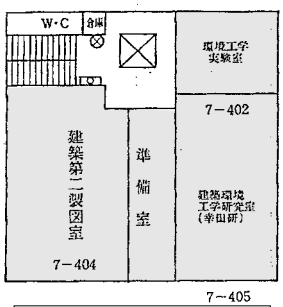
新設の小木曽研究室は３号館７階に設けられた。

3）研究室の大幅入れ替え（1972/ 昭和 47 年度）

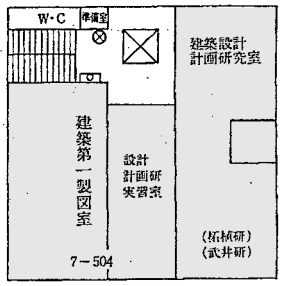
大学施設の拡充によって建築学科の面積も充実し、研究室の大幅なレイアウト変更が行われた。図書室の移動、製図室等の間仕切、研究室の配置変更などが行なわれているが、施設の狭隘のための苦しいやりくりが窺われる。



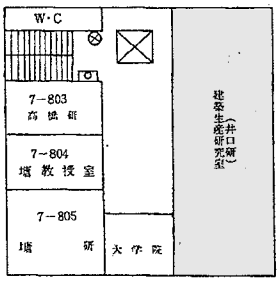
７号館　１階



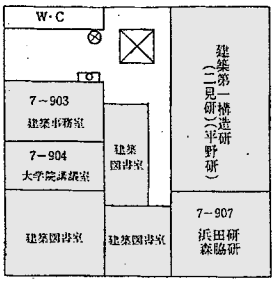
7号館　4階



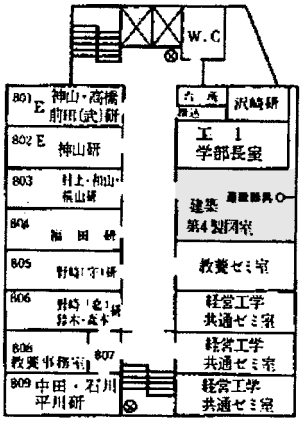
7号館　5階



7号館　8階



7号館　9階

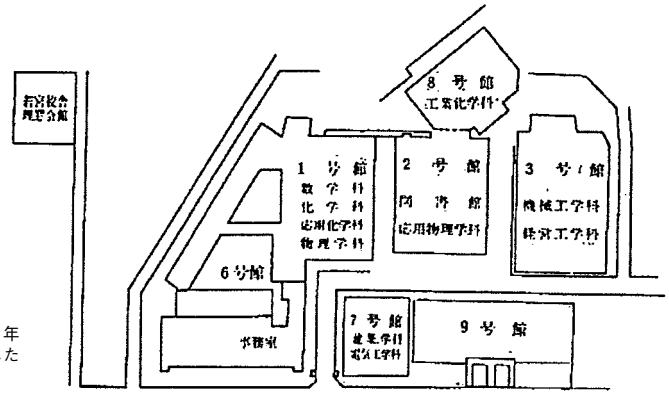


3号館　8階

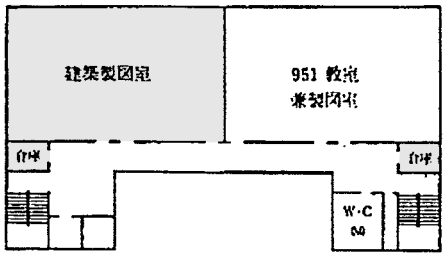
3号館8階の会議室が建築学科の第3製図室になった。9号館完成時（昭和51/1976年度）には第4製図室に改称される。

4）9号館の竣工と工学部第二部設置（1976/昭和51年度）

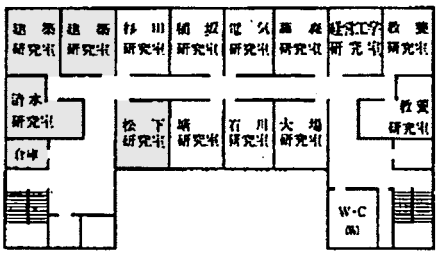
木造の事務棟があった場所に、9号館が建設された。新設された工学部第二部建築学科は、9号館の5・9階に入った。



案内図。若宮校舎（1971/昭和46年度建設）は理窓会館として建設されたことが分かる。



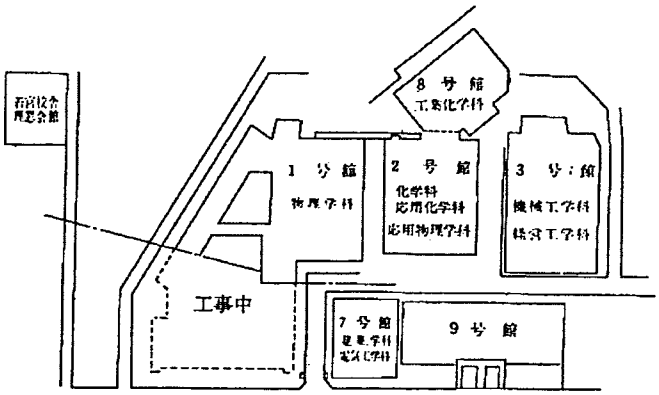
9号館　5階



9号館　9階

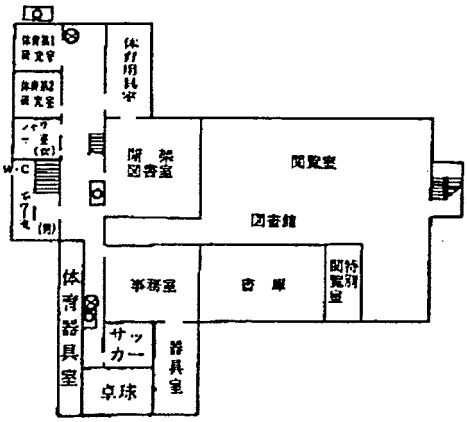
5）1号館の改築（1978/ 昭和 53 年度から）

物理学校時代以来の1号館(昭和6/1931年建設)は、継ぎ足しの増築(6号館も)で廊下の動線はまさに迷路であり、階段にまで(足をかませて)ロッカーが置かれている状態は、部外者にはちょっと立ち入りが憚られる状態で、避難上も危険な状態であった。老朽化も進んでおり、改築が望まれていた。屋上にあった祠は「落第神社」と俗称されていた。

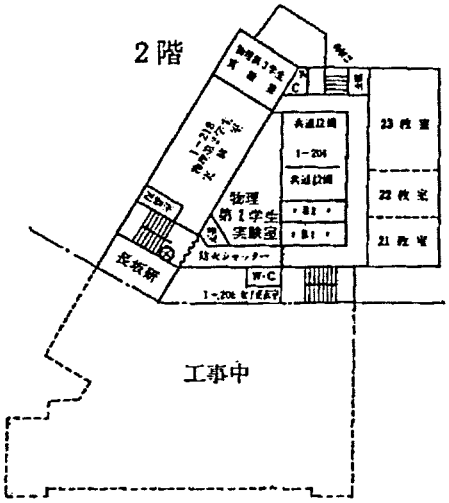


工事中の配置図。1号館の旧棟から解体が進んだ。

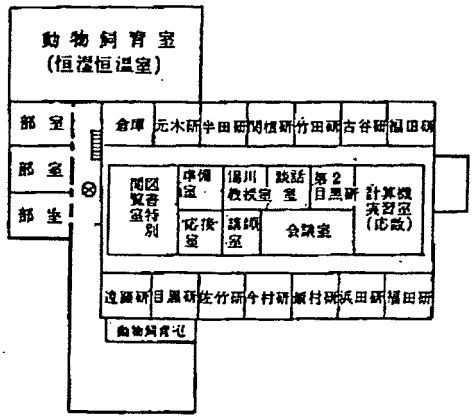
1号館の改築工事中は、薬学校舎の体育館内に図書館と中2階の研究室が設けられた。



薬学部校舎　5階



6号館　2階

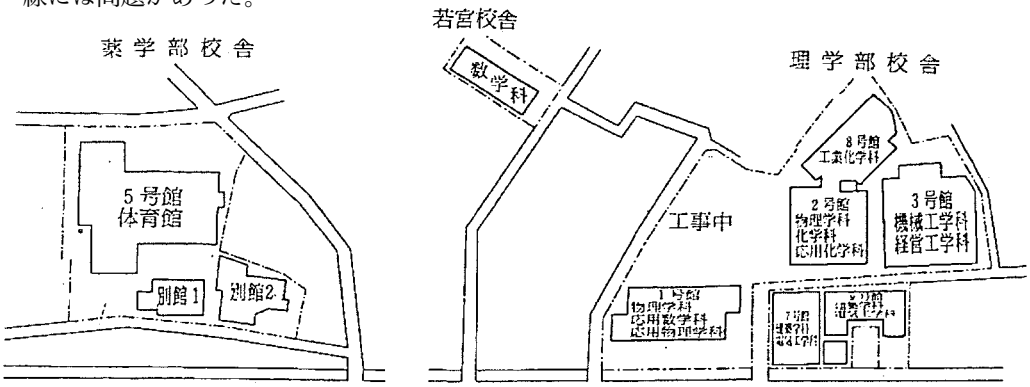


薬学部校舎　6階(5階上部)

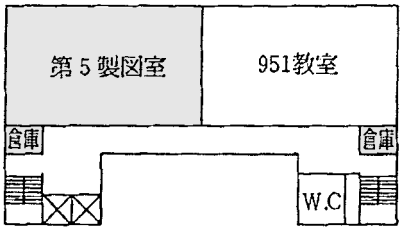
6号館の三角形の中庭を塞いで、鉄骨造の仮設校舎が建設された。

6）1号館竣工（1980/ 昭和55年度）

1号館が竣工し、主として理学部と大学本部に宛てられたが、これに伴う工学部の面積増もあった。図書館は9～11階にあり、エレベータの能力や階段の配置など、学生の動線には問題があった。

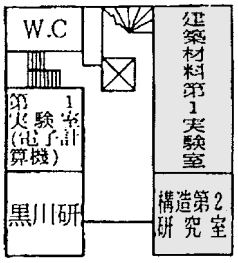


案内図では、遅れて竣工した6号館は、まだ工事中。



9号館　5階

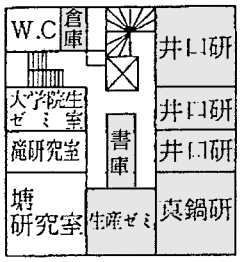
A科の面積増分は、主として9号館に充てられた。5階に建築学科第5製図室が出来たが、隣の一般教室951も、設計製図や演習など建築学科の講義に多く用いられた。3号館の「第4」製図室はなくなったが、951教室が言わばその代替スペースとなった。結果的に第4製図室が抜けた付番だが、縁かつぎではない。



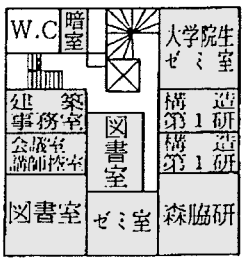
7号館　1階

7号館1階・A科構造研究室の一部がE科スペースになった。

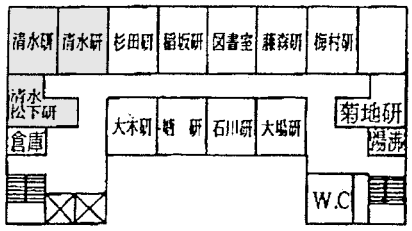
7号館8階・E科の一部がA科生産コースのスペースになった。公式の図面にはないが、1階と8階との面積の差は、8階ホールを両学科で按分して間仕切ることで調整し、このスペースは使用頻度の低い図書の書庫とされた。



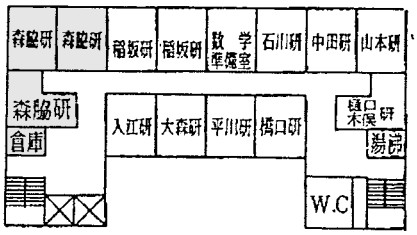
7号館　8階



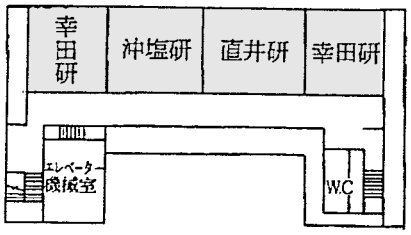
7号館　9階



9号館　9階



9号館　10階

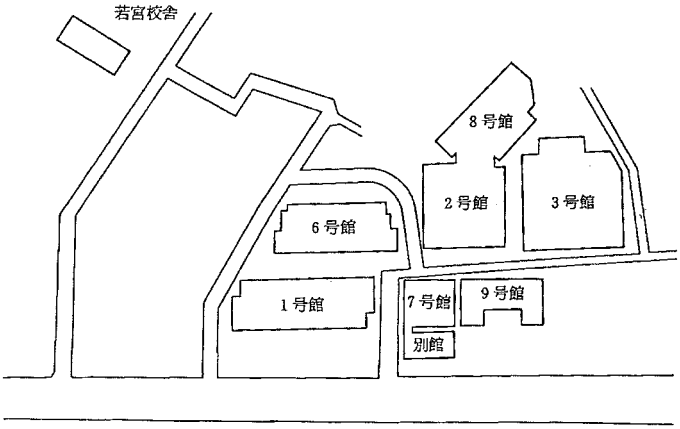


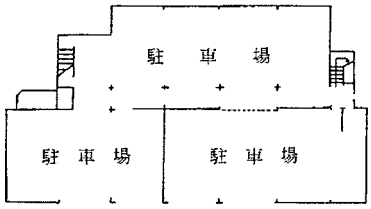
9号館　11階

9階の一部と、1号館建設時は会議室・学長室などがあった11階が、A科研究室になった。

7）6号館竣工（1981/昭和56年度）

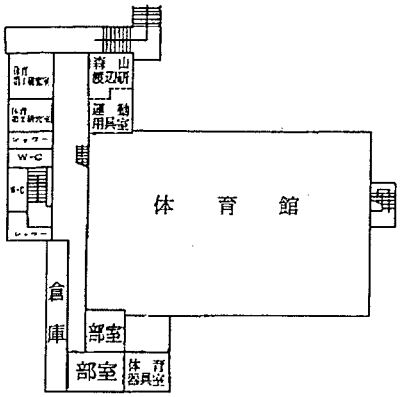
1号館に遅れて、別棟の6号館が竣工した。



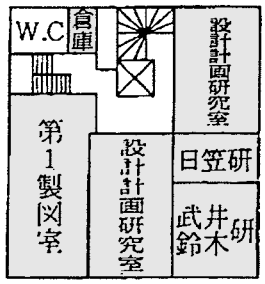


6号館　1階

6号館1階は当初は駐車場であった。

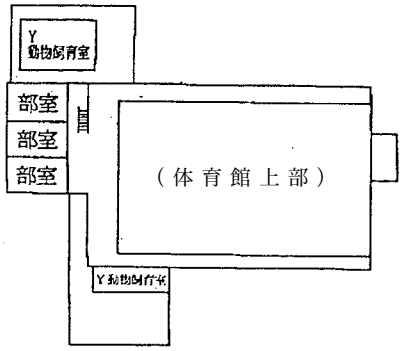


薬学部校舎　5階



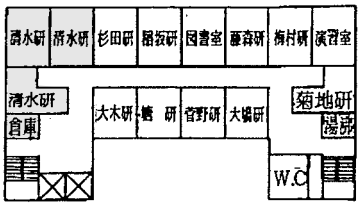
7号館　5階

7号館の変化としては教員数変更による室名・間仕切変更があった。

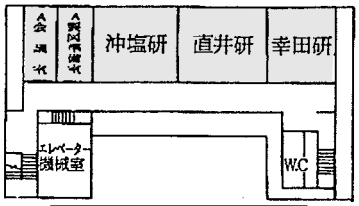


薬学部校舎　6階

一時的に図書室・研究室に充てられていた体育館は、もとの用途に戻され、体育館も改善された。



7号館　9階

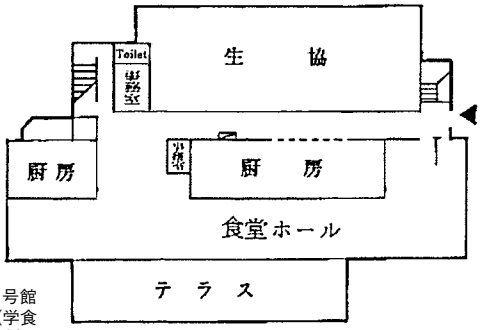


7号館　11階

9号館でも教員数変更による室名・間仕切変更があった。

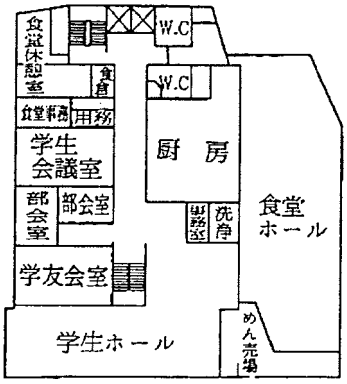
8）6号館・3号館の改装（1986/ 昭和61年度から）

6号館1階は駐車場や地下消防水槽のため転用は不可とされていたが、1986（昭和61）年になって学食・学生ホール、生協（1号館北棟1階で床屋や時計屋もあった典型的な昔の生協であったが、1号館工事中は9号館前の2階建てプレハブに仮移転中）が移った。



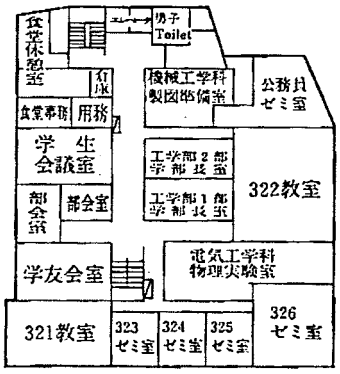
駐車場は生協・学食（設計：井口教授）、1号館との中庭にはガラス屋根を掛け学生ホール（学食兼用スペース）になった（1986/ 昭和61年度）。

6号館　1階



旧・3号館　2階

3号館2階にはそれまで学食・学生ホール・学友会等があった（1985/ 昭和60年度）。

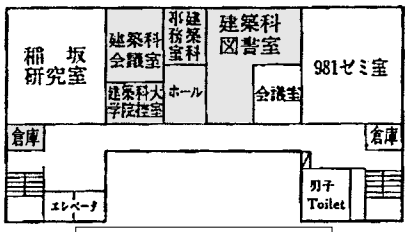


3号館　2階

学食の跡には教室・ゼミ室等が設けられた（1987/ 昭和62年度）。

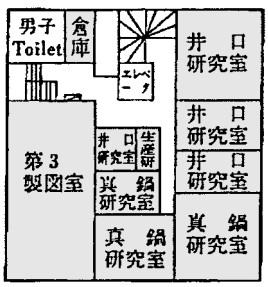
9）7号館・9号館の大移動（1987/ 昭和62年度）

3号館2階スペース発生によって工学部にも面積増があり、学科のスペースにも大きな移動があった。7号館9階の事務室・図書室が9号館8階へ移動し、7号館8階（生産系）と9階（構造系）が入れ替わった。この他にも人事交代による若干の室目変更があった。



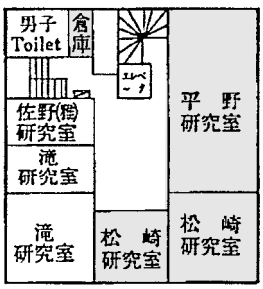
9号館　8階

ゼミ室等のあった9号館8階はA科に配分され、7号館9階の図書室・学科事務室・会議室が入った。



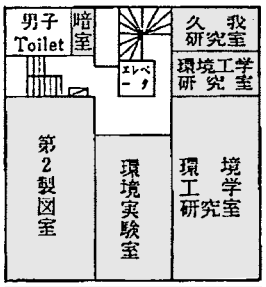
7号館　9階

7号館9階には、8階の生産研究室と4階・第3製図室が入った。



7号館　8階

8階には、9階の構造研究室が入った。

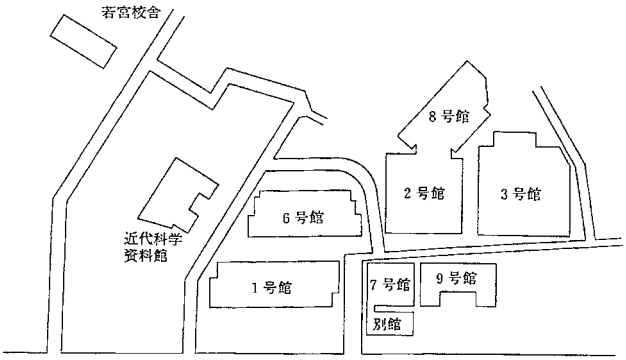


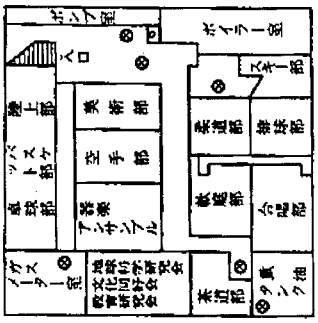
7号館　4階

4階の第3製図室は、以前からの懸案であった環境実験室になった。

10）創立 110 周年の頃（1991/ 平成３年度）

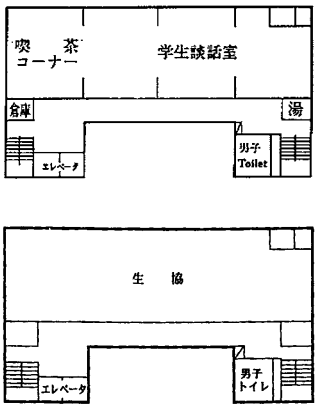
理科大創立 110 周年を記念して、近代科学資料館が建てられた。近代科学資料館は物理学校の建物をイメージしたファサードの建築で、博物館、理事会関係書室のほか、情報処理関係施設が設けられた。





７号館　地階

７号館地階は、本来は建築環境実験室に充てられる予定であったが、学園紛争時以来、部室として使われていた。図の部屋割は 1979（昭和 54）年度ごろの状態。

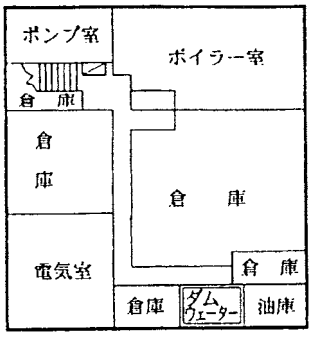


９号館　２階

６号館の生協は、学生談話室の充実のため、９号館２階の学生談話室と入れ替えが行なわれた。当時の生協理事長（真鍋）は、売り場面積、動線、耐力壁によるバックヤードとの分断などを理由で、移転に反対を表明したが、周囲の圧力で已むなく移転を受諾した（1993/ 平成５年度）。

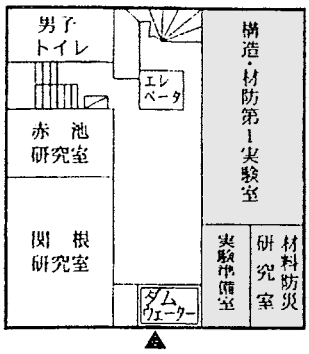
11）その後の７・９号館ほか

９号館前等に別棟が建設されるなど、部室が充実されたことで、７号館地下の部室が無くなったが、大学事務用スペースとなった。７号館・９号館ともに、教員交替に伴う室名変更があった程度である。



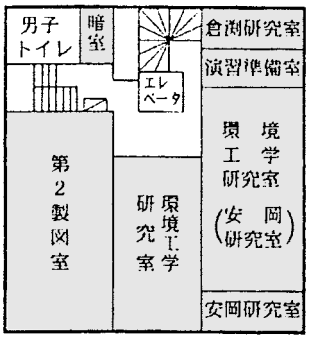
７号館　地階

せっかく空いた７号館地階も、Ａ科懸案の環境実験室には配分されなかった。

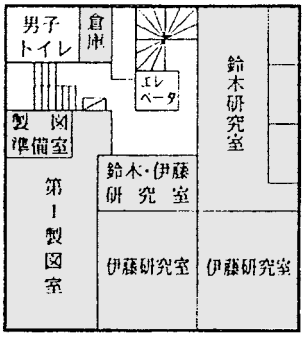


７号館　１階

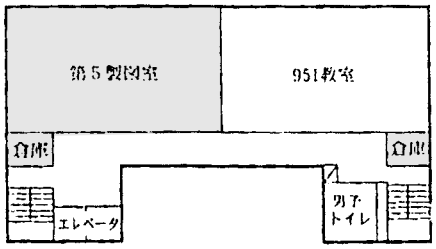
倉庫の搬出入のためにダムウェイターが設置されたが、柱の基礎フーチングを避けるため、玄関ホールのガラス面に張り出す位置になった。



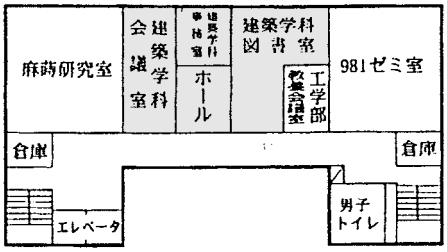
7号館　4階



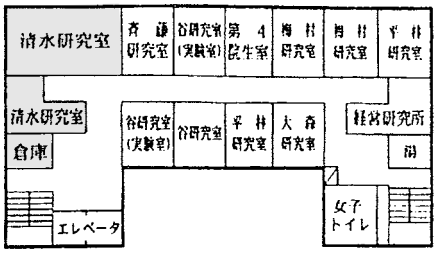
7号館　5階



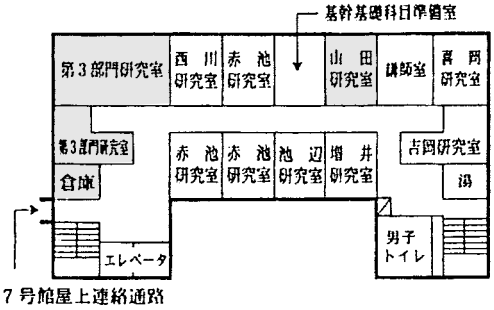
9号館　5階



9号館　8階

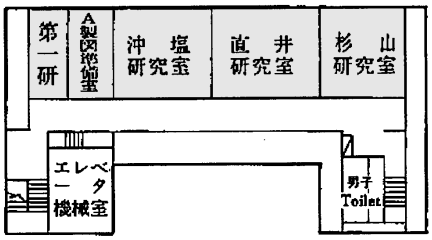


9号館　9階

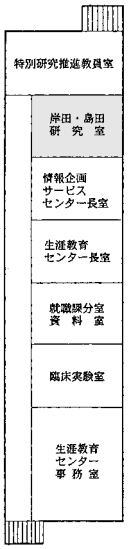


9号館　10階

第一部基幹基礎山田研究室は９号館10階にあったが、2001（平成13）年の転出後は大学院生室、その後は建築学科小会議室になった。



9号館　11階

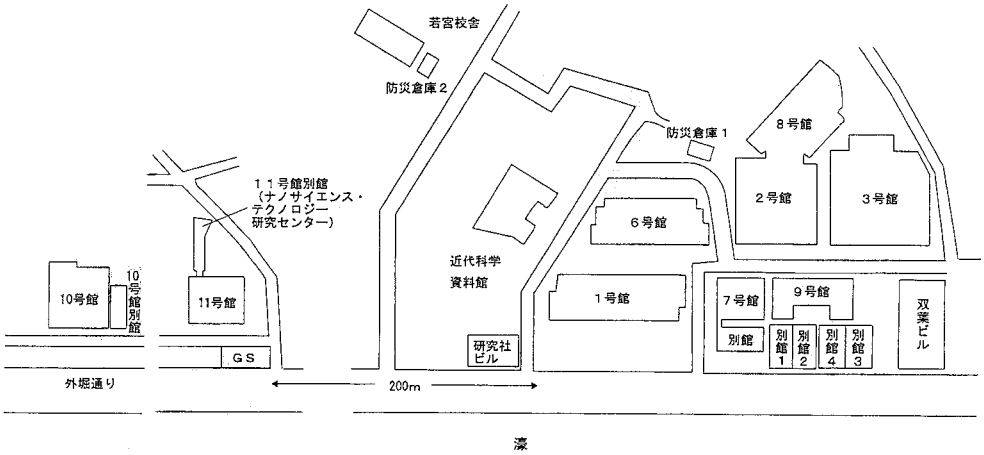


第二部・岸田研究室（1993／平成５年～）はプレハブ２階建の10号館別館２階にあった。

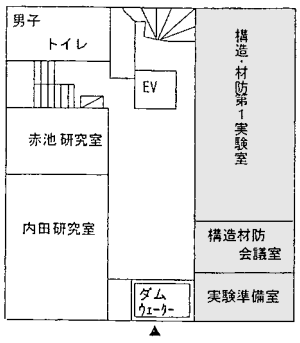
10号別館　2階

12）神楽坂校舎の最終形（2002/平成14～2005/平成17年度）

神楽坂キャンパス再開発前の、いわば最終形である。

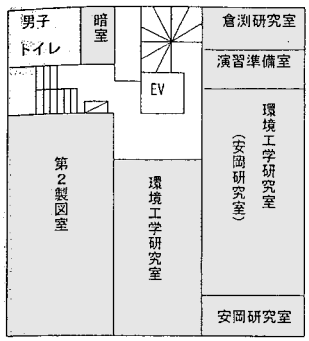


神楽坂校舎案内図。校地周囲の土地は来るべき再開発を見越して少しずつ購入されていた。いくつかの別館が建てられていた。多くはプレハブの仮設建築であった。神楽坂新2号館を中心とする再開発は実現しなかったが、7・9号館の別館は九段取得や再開発対応でその後解体されている。この他に、隣接する双葉ビル等や研究社ビルにも多くの賃借スペースが使われていた。

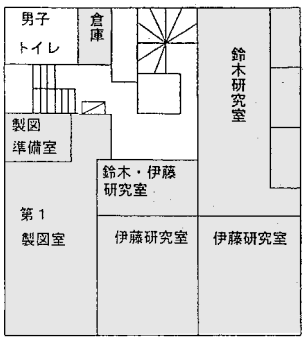


7号館　1階

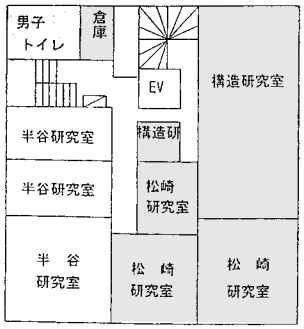
7号館　1階別棟



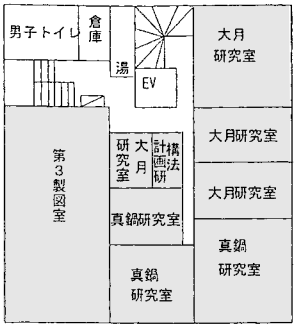
7号館　4階



7号館　5階

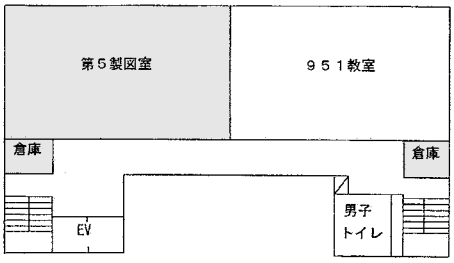


7号館　8階

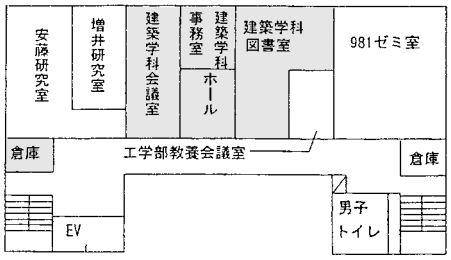


7号館　9階

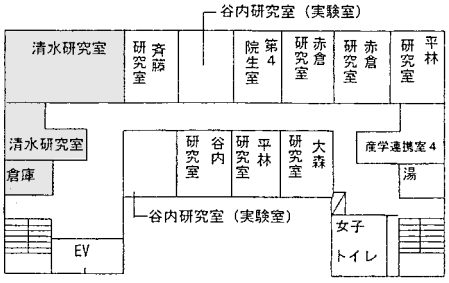
7号館最終形。多少の間仕切変化や室名変更以外に目立った変化は無い。



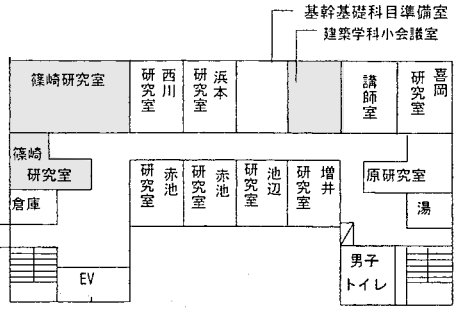
９号館　５階



９号館　８階



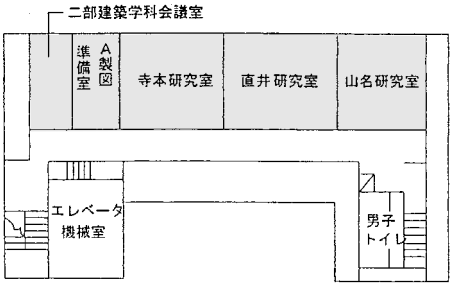
９号館　９階



７号館屋上連絡通路

９号館　１０階

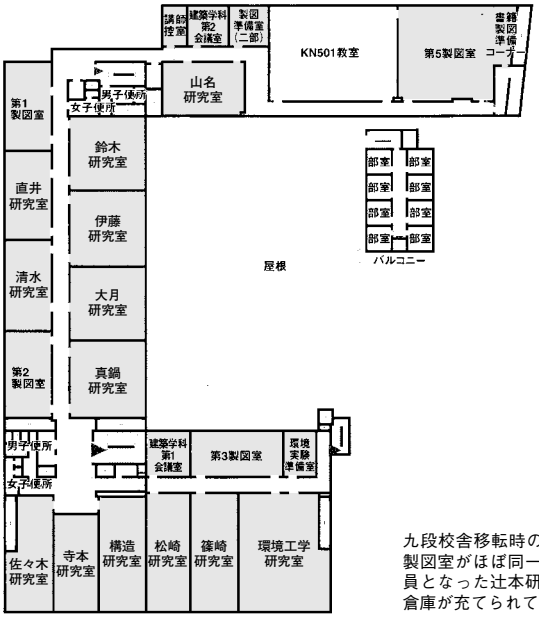
９号館最終形についても同様である。



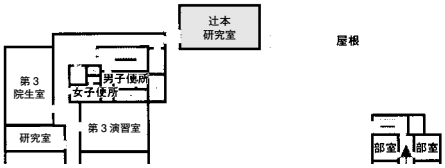
９号館　１１階

13）九段仮校舎へ移転（2006/ 平成 18 年度）

旧日本住宅公団本社ビルを購入して、神楽坂キャンパス再開発期間（当初は３年間の予定）の仮校舎として使う事になった。工学部第一部５学科の内、Ｃ科は前年に竣工した新５号館へ移転し、残り４学科が九段校舎へ移転した。



5階

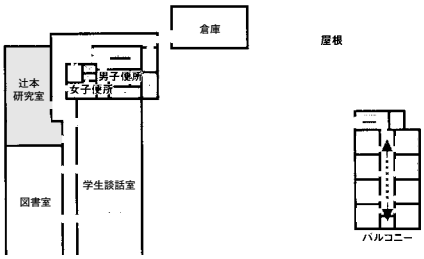


6階

九段校舎移転時の部屋配置。Ａ科は第一・二部全研究室・製図室がほぼ同一フロアにおさまったが、移転決定後に増員となった辻本研究室は、スペースが無いため６階屋上の倉庫が充てられていた。

14）九段校舎の最終形（2012/ 平成 24 年度）

5階



6階

ｉ科の神楽坂校舎への移転（2010/ 平成 22）で空いた６階が学生談話室･図書室､および辻本研究室（屋上から移動）に変わった。５階は建築として変化は無いが、室名が変わらなかった研究室は（空席を除けば）４室だけ（図中※）で、九段校舎の７年間での変動が大きかったことが分かる。

2-3. カリキュラムの変遷

1）第一部カリキュラムの変遷

初年度から現在までのカリキュラム構成の主要な変化を追った。時代の要請に対応して、高い頻度で科目構成や必要単位数の変更が行なわれていることが分かる。教養科目より専門科目を重視する傾向や、その逆の傾向など、さまざまな理由でその都度変更が行われて来た。

特筆すべきは、専門必修科目の１単位化である。それぞれの分野で最低限必要と主張する科目を必修化して行った結果、卒業必要単位数が異常に増えた（まともに計算したら160単位を超えた）ため、その対策として本来は２単位であるべきところを、形式上は演習科目扱いで１単位として、総単位数を押さえていた（成績順位を計算する場合は、こうした科目は２倍の重みに修正して計算していた）。こうした変則的な状況は、1987年度から2007年度入学の学生まで続いたが、詰め込み教育との批判がある一方で、ある意味で理科大らしい実力主義の、高密度な教育が行われていた時代でもあった。それが良かったのか悪かっ

年度	卒業必要単位	教養科目			専門科目				
		必要単位	教養科目内容		必要単位	必修	選択必修	選択	特記事項（△：選択必修、F：前期、L：後期、u：単位）
1962 (S37)	128	56 ?							「学修簿」の形はまだ無く、１枚の紙の「成績原簿」のみ残存
1963 (S38)	128	56	人文12・会12・自然12・体育4・外国語16（英独）		72	60	2	10	教養科目：必要単位科目のみで選択の余地なし 専門選択19科目
1964 (S39)					72	56	4	12	専門選択14科目、教職科目加わる
1965 (S40)					72	64	4	4	専門科目充実で専門選択必要単位数削減
1967 (S42)									
1968 (S43)					72	66	4	2	同上・さらに削減
1970 (S45)					72	64	4	4	「物理学実験」（必）廃止
1973 (S48)	139	56			83	71	8	4	4コース制実施／科目名大幅変更／3L△3u（4中2選）+4F△2u（4中1選）／各部門「S」新設
1975 (S50)									「応用数学」→「電算機及び応用数学」（科目名変更）
1978 (S53)			第二外語に「仏語」新設（S54「フランス語」）。						
1980 (S55)	145	56			89	77	8	4	専門必修科目増強／数学デフレ廃止で「微積及演習」新設／「推計学」→「統計学」など
1981 (S56)									
1983 (S58)									
1984 (S59)									5（4.5）コース制実施
1986 (S61)									
1987 (S62)	137	56	36（人文10～＋社会10～＋自然12+総合）＋外語16（2箇国語以上）＋体育4		81	63	8	10	専門必修1単位科目20以上設定／専門選択29科目に増強／設計製図「製図委員会」管理／「建築法規」選択に
1989 (H1)	138	56			82	64	8	10	「建築概論」新設（野田授業対応）、「自由研究１・２」新設

たのかは、現段階ではまだ判断できないかもしれない。

また、1994（平成6）年度には、教養と専門に跨がる科目区分の大幅変更があり、従来の一般教育（教養）科目の半数近くの単位数が専門領域に組み込まれた。これに応じて専門科目にも大幅な変更があった。

学生の適用カリキュラムは原則として入学年度で決まるので、変更は年次進行となって、異なるカリキュラムの学生が並行して在学することになる。科目が変更・廃止になって再履修の際に科目の読み代えが出来ない場合は、再履修学生だけに特別授業を開講する場合もある。

資料は主として学修簿（永久保存）と同内容の履修案内（名称は講義概要、シラバス等に変化）に拠ったが、変更理由や経緯については、教室会議記録等を参考にした。真鍋の記憶に拠った箇所もあるが、主要な変化はほぼ追っていると思われる。初年度は教養科目だけでスタートしており、学修簿の形では残っていない。

	２年進級関門条件	卒業制作等： ４年進級の 年度から適用	卒研履修要件：実際には４年進級時（改正の３年以上後）に適用 科目名等は一部短縮（「建築」・「科目」を省く、「まで」→「迄」…etc.）	年度
		卒業計画＋卒業論文で６u		1962 (S37)
	数学物理科学英語各4u	卒業計画＋卒業論文で6u、20時間	「建築学科より指示」と記され、具体的な履修資格の記述は学習簿にない	1963 (S38)
		卒業論文2u＋卒業設計2u、両方必修、時間記載なし		1964 (S39)
				1965 (S40)
	数学・物理・化学・英語各4uを「1年指定必修科目」と指定。			1967 (S42)
				1968 (S43)
				1970 (S45)
		「卒業制作」4u、「卒業研究」4u、両方必修		1973 (S48)
	原級者は新1年生学習簿に従う			1975 (S50)
			①以下すべて修得：建築構造及び演習E、設計計画及び製図A1・A2・A3、選択必修科目（構造F・計画B・環境B・生産B）中2 ②上記以外3年次までの専門必修：未修2科目かつ6単位以下。 ③一般教育科目未修：1科目以下。（卒研履修資格を学修簿に明記、追記配布でこの年度3年生から適用）	1978 (S53)
				1980 (S55)
	数学、物理学、A英語、の3科目12u（化学なし）。			1981 (S56)
			①以下すべて修得：建築構造及び演習E、設計計画及び製図A1・A2・A3、選択必修科目（構造F・計画B・環境B・生産B）4科目中2 ②上記以外の3年次までの専門必修：未修2科目かつ6単位以下 ③一般教育・外国語・保健体育：未修1科目以下	1983 (S58)
			①以下すべて修得：建築構造及び演習E、設計計画及び製図A1・A2・A3、選択必修科目（構造F・材料防災F・計画B・環境B・生産B）5科目中2 ②上記以外3年次までの専門必修：未修得2科目かつ6単位以下 ③一般教育・外国語・保健体育：未修1科目以下	1984 (S59)
		「卒業制作」4u、「卒業研究」4u、両方必修、各12時間		1986 (S61)
			①以下すべて修得：設計製図Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、3年次までの選択必修5科目中2科目、専門選択科目8単位 ②上記以外3年次までの専門必修：未修得3科目以下 ③一般教育科目・外国語・保健体育：未修1科目以下	1987 (S62)
				1989 (H1)

年度	卒業必要単位	教養科目			専門科目				特記事項（△：選択必修、F：前期、L：後期、u：単位）
		必要単位	教養科目内容		必要単位	必修	選択必修	選択	
1990（H2）	132	56	一般教育科目24（人文・社会各6u～＋自然＋総合）＋語学16（第一外8u＋第二6u＋選必2）＋体育4＋基礎12		76	51	8	17	教養科目削減（物・化が各選択必修で1つで良い）／専門選択44科目（未開講あり）／図学まだ通年／選択必修コース名：「建築生産」→「構法計画」

年度	卒業必要単位	専門領域外科目		専門領域科目							（「基幹基礎」：数・物・化）
				基礎科目			専門科目				
		必要単位	科目内容	必要単位	基幹基礎	専門基礎	必要単位	必修	選択必修	選択	
1994（H6）	128	30	英語8＋人間科学22（保健体育：選択に）／第二外語に「中国語」新設	33	11	22	65	35	5	25	教養・専門の科目区分大幅変更。3部門制実施／△5uは3L部門3+4Fゼミ2／専門選択≒43科目（未開講あり）
1996（H8）			英語8＋英語以外語学2＋人間科学20（第2外語取らせるため）								専門科目細かい入れ替えいろいろあり／専門選択≒40科目
1999（H11）											専門選択≒44科目
2002（H14）											科目名の番号が「Ⅰ」→「1」に／専門必修1単位科目≒34あり
2005（H17）											
2008（H20）	149	30		48	16	32	71	48	3	20	大幅見直し／専門1単位科目を2単位に戻す／4F部門ゼミ△2u廃止
2009（H21）	143	30		32	16	16	81	52	11	18	3Lの各部門演習以外に、3Fにもコース選択必修科目設置
2010（H22）											年間履修上限60単位
2012（H24	133	30		30	14	16	73	46	9	18	3L部門演習以外に3F等にも選択必修科目設置／選専門択科目41

2）第二部カリキュラムの特徴

以下に、第二部のカリキュラムの特徴、特に第一部との対比の観点からみた特徴について、箇条書きにまとめる。なお、「工学部第二部建築学科の略史」にも、当然、カリキュラムに関する記述があるが、ここでは、それとの重複を恐れず、特徴的なことは一通り記述しておくこととする。

・学科開設当初は、本学の実力主義教育に従い、第一部で行ってきた教育に準じた教育を行う方針でカリキュラムが組まれた。ただし、授業時間が70分と短く（夏季休暇を縮めることなどにより当時の文部省からは認められていた）、平日は3コマしか授業が行えないため、一部よりはコンパクトなカリキュラムとなっていた。この基本的な性格は、現在も大きくは変わっていない。

・科目構成も第一部の専門分野構成に倣い、ただし専任教員が少ないことにかんがみ、５つの系（計画、構法、環境、構造、材料・防災）で構成された。なお、専任教員の定員は当初３人であったが、これは「大学設置基準」により、第二部の教員数は、第二部を兼担する第一部教員の協力を得ることにより、第一部の教員数（当時、定員９人であった）の３分の１以上であればよいとする規定に従ったものである。その後、この定員数は、1986年には４人に、また、2006年に至って５人に増員され、５つの系にそれぞれ専任教員が配置できることとなった。

・４年間のカリキュラムのなかの重要な節目として、第一部同様、１年次から２年次に進級する条件を定め

	２年進級関門条件	卒業制作等： ４年進級の 年度から適用	卒研履修要件：実際には４年進級時（改正の３年以上後）に適用 科目名等は一部短縮（「建築」・「科目」を省く、「まで」→「迄」…etc.）	年度
	自然(数、物Ⅰ・物Ⅱ)・基礎教育(製図基礎・力学基礎・図学・数A1・数B1)・外国語(A英一・A英二)9科目中7(物理Ⅰ・Ⅱ両方合格でも1科目と数える)。上記の他、1年専門必修6科目中4。		①以下すべて修得：基礎教育科目12単位、設計製図Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、3年次までの選択必修5科目中2科目、専門選択科目14単位 ②上記以外の3年次までの専門必修：未修得3科目以下 ③一年指定必修科目および一年指定選択必修科目合計9科目すべて修得 ④一般教育・外国語・保健体育：未修1科目以下	1990 (H2)
	２年進級関門条件	卒業制作等	卒研履修要件	年度
	数・物・英選択必修6中4の他に専門基礎12中9など	卒論α・β方式選択：「卒業研究及び卒業制作」8u、24時間	①設計製図Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ3科目履修 ②三年次までの選択必修3科目中1科目修得 ③専門選択科目21単位修得 ④上記以外の三年次までの専門必修科目・専門基礎科目：未修得3科目以下 ⑤基幹基礎科目卒業所要単位修得 ⑥一般科目卒業所要単位：未修2単位以下	1994 (H6)
				1996 (H8)
				1999 (H11)
				2002 (H14)
			①設計製図1・2・3、環境測定、構造材料実験及び演習の5科目履修 ②3年次迄の選択必修科目3科目中1科目修得 ③専門選択科目21単位修得 ④基幹基礎科目・一般科目：卒業所要単位修得 ⑤上記以外3年次迄の専門必修、専門基礎：未修得2科目以下	2005 (H17)
		卒業研究及び卒業制作6u	③専門選択科目のうち16単位を修得していること（それ以外は従前どおり）	2008 (H20)
			①設計製図1・2修得 ②設計製図3、環境測定、構造・材料実験及演習：3科目中2修得 ③第一・二・三部門演習：3科目中1修得 ④専門選択科目14単位修得 ⑤基幹基礎科目、一般科目：卒業所要単位修得 ⑥上記以外3年次迄の専門必修、専門基礎科目：未修得2科目以下	2009 (H21)
				2010 (H22)
	数物英7科目中4			2012 (H24

た関門制度が設けられた。関門科目としては、いうまでもなく、専門である建築を学ぶ上で必要となるいくつかの基礎科目が設定されたが、具体的な科目種類は、時代により若干変わってきている。

・4年間の学修の総まとめの意味で、卒業研究（最初は建築学特論といった）および卒業設計（最初は総合設計といった）が設けられた。これを重要視する考え方は、現在に至るまで変わっていない。

・2年次または3年次への編入学生が多いことから、建築の専門科目のほとんどを2年次以降に配置するカリキュラムとしている。

・第二部学生の大学院進学希望者の増加に対応し、大学院の昼夜開講を可能とするため、1995年に、授業時間が70分授業から90分授業に変更された。このため、夜の授業時間帯で1日3コマとれていた授業が、1日2コマの授業しかとれないこととなった。そこで、それまで1日3コマ週5日の授業（すなわち週15コマの授業）で修得できた必要単位を同じだけとるための履修方法として、夕方から始まる第一部の最後の1コマを入れて1日3コマの授業をとり、週5日で修得するか、あるいは、社会人など夜しか来られない学生向けに、1日2コマ週5日と土曜の午後から開講される5コマとを合わせて従来と同じコマ数をとるか、そのふたつの選択肢が用意されることとなった。この形が現在まで続いている。

2–4. 補職等の変遷

1） 建築学科・建築学専攻の主な補職

対象：継続的な補職にはこの他にも学生部委員、学部図書委員等もあるが、この表からは省いた。
発足：初期については補職の記録が無く、正規に「学科幹事」が規定された時期は不明。また、人事の記録では単に「学科幹事」とあるだけで、担当役職の記録は無い。出典は工学部事務および教室会議記録に拠ったが、初期については不明である（確認の無い箇所には「？」を付した。

				工学部第一部・建築学科				
期	年度	西暦	任期※	学科主任	教務幹事	ＦＤ幹事	就職幹事	
							年度前期※	年度後期※
1	37	1962	1962.4～9	浜田　稔	（記載なし）			
1	37	1962	10月～翌9月？	浜田　稔	〃			
2	38	1963	〃	二見秀雄	〃			
3	39	1964	10月～翌9月	二見秀雄	〃		（記載なし）	森脇哲男？
4	40	1965	〃	二見秀雄	〃		〃	（記載なし）
5	41	1966	〃	柘植芳男	池松　真		平野道勝	平野道勝
6	42	1967	〃	柘植芳男	井口洋佑		（記載なし）	武井正昭
7	43	1968	〃	柘植→碓井	平野道勝		武井正昭？	池松　真
8	44	1969	〃	碓井→武井	小木曽→井口		池松　真	小木曽定彰？
9	45	1970	〃	武井正昭	平野道勝		碓井憲一	井口洋佑
10	46	1971	〃	武井正昭	幸田　彰		井口（平野？）	平野道勝
11	47	1972	〃	幸田　彰	井口洋佑		平野道勝	平野道勝
12	48	1973	〃	幸田　彰	森脇哲男		平野道勝？	武井正昭
13	49	1974	〃	森脇哲男	鈴木信宏		武井正昭？	久我新一
14	50	1975	〃	森脇哲男	真鍋恒博		久我新一	同左
15	51	1976	〃	久我新一	真鍋恒博		井口洋佑	同左
16	52	1977	〃	久我新一	平野道勝		鈴木信宏	同左
17	53	1978	〃	武井正昭	平野道勝		真鍋恒博	同左
18	54	1979	〃	武井正昭	鈴木信宏		久我新一	同左
19	55	1980	〃	森脇哲男	鈴木信宏		平野道勝	同左
20	56	1981	〃	平野道勝	真鍋恒博		武井正昭	同左
21	57	1982	〃	平野道勝	真鍋恒博		森脇→久我	久我新一
22	58	1983	〃	久我新一	松崎育弘		井口洋佑	同左
23	59	1984	〃	久我新一	松崎育弘		真鍋恒博	同左
24	60	1985	〃	武井正昭	内田　茂		鈴木信宏	同左
25	61	1986	〃	武井正昭	内田　茂		松崎育弘	同左
26	62	1987	〃	森脇哲男	鈴木信宏		松崎育弘	同左
27	63	1988	〃	井口洋佑	鈴木信宏		内田→武井	武井正昭
28	1	1989	〃	井口洋佑	松崎育弘		真鍋恒博	同左
29	2	1990	〃	平野道勝	松崎育弘		真鍋恒博	同左
30	3	1991	〃	平野道勝	真鍋恒博		吉澤　晋	同左
31	4	1992	〃	吉澤　晋	真鍋恒博		吉澤　晋	鈴木信宏
32	5	1993	〃	吉澤　晋	倉渕　隆		鈴木→松崎→鈴木	鈴木信宏
33	6	1994	〃	松崎育弘	倉渕　隆		鈴木信宏	真鍋恒博
34	7	1995	〃	松崎育弘	伊藤裕久		真鍋恒博	真鍋恒博
35	8	1996	〃	松崎育弘	伊藤裕久		真鍋恒博	真鍋恒博
36	9	1997	〃	真鍋恒博	伊藤裕久		真鍋恒博	倉渕　隆
37	10	1998	〃	真鍋恒博	鈴木信宏		倉渕　隆	倉渕　隆
38	11	1999	〃	松崎育弘	鈴木信宏		倉渕　隆	伊藤裕久
39	12	2000	〃	松崎育弘	大月敏雄		伊藤裕久	伊藤裕久
40	13	2001	〃	松崎育弘	大月敏雄		伊藤裕久	篠崎祐三
41	14	2002	〃	真鍋恒博	篠崎祐三		篠崎祐三	大月敏雄
42	15	2003	〃	真鍋恒博	篠崎祐三		大月敏雄	大月敏雄
43	16	2004	〃	篠崎祐三	大月敏雄		大月敏雄	倉渕　隆
44	17	2005	〃	篠崎祐三	大月敏雄		倉渕　隆	倉渕　隆
45	18	2006	〃	伊藤裕久	長井達夫		倉渕　隆	佐々木文夫
46	19	2007	〃	伊藤裕久	長井達夫	宇野　求	佐々木文夫	佐々木文夫
47	20	2008	〃	伊藤裕久	長井達夫	宇野　求	佐々木文夫	佐々木文夫
48	21	2009	〃	倉渕　隆	郷田桃代	宇野　求	佐々木文夫	伊藤拓海
49	22	2010	〃	倉渕　隆	郷田桃代	伊藤裕久	伊藤拓海	伊藤拓海
50	23	2011	〃	栗田　哲	伊藤拓海	伊藤裕久	伊藤拓海	長井達夫
51	24	2012	〃	栗田　哲	伊藤拓海	熊谷亮平	長井達夫	長井達夫

専攻幹事：昭和41・42年度に「主任が兼務」との記録があるが、別個の補職になったのが1975（昭和50）年度からかどうかは確証が無い。
任期：学内の補職は、原則10月交替であるので、工学部第一部就職幹事の1975～1993年度を除くすべての補職が、該当年度（10.01）からその次年度前期（9.30）までである。ただし工学部第一部では、求人時期が早まったことに対応して、就職幹事だけを年度交替で運用していた時期があるので、任期は前期後期に分けて表示した。

	備考（一部補職全般について）	工学部第二部 建築学科			大学院
		学科主任	教務幹事	就職幹事	専攻幹事
	任期記録無（多分10月交替）				（記載なし）
					〃
					〃
	森脇：「就職係」の記録も				〃
					〃
					主任が兼務
					主任が兼務
	主任：碓井憲ー69.4～				（記載なし）
	碓井（主任）・小木曽（教務）70.3辞退				〃
					〃
					〃
					〃
					〃
					〃
	就職：年度交替の運用開始				武井正昭
		松下清夫	清水昭之		武井正昭
		松下清夫	清水昭之		井口洋佑
		幸田　彰	清水昭之		井口洋佑
		幸田　彰	清水昭之	直井英雄	井口洋佑
		幸田　彰	清水昭之	直井英雄	井口洋佑
		沖塩荘一郎	清水昭之	直井英雄	井口洋佑
	就職：森脇入院→久我83.9～	沖塩荘一郎	清水昭之	直井英雄	井口洋佑
		沖塩荘一郎	清水昭之	直井英雄	日笠　端
		沖塩荘一郎	清水昭之	直井英雄	日笠　端
	専攻：日笠→久我86.4～	沖塩荘一郎	清水昭之	直井英雄	日笠→久我
		沖塩荘一郎	清水昭之	直井英雄	久我新一
		杉山英男	清水昭之	沖塩荘一郎	井口洋佑
	就職：内田亡→武井88.7～	沖塩荘一郎	清水昭之	直井英雄	平野道勝
		沖塩荘一郎	清水昭之	直井英雄	平野道勝
		沖塩荘一郎	清水昭之	直井英雄	武井正昭
		直井英雄	清水昭之	直井英雄	森脇哲男
	就職：10月交替へ戻る	直井英雄	清水昭之	沖塩荘一郎	井口洋佑
	就職：鈴木入院の間代行松崎	直井英雄	清水昭之	沖塩荘一郎	井口洋佑
		直井英雄	清水昭之	沖塩荘一郎	井口洋佑
		直井英雄	清水昭之	沖塩荘一郎	鈴木信宏
		直井英雄	清水昭之	志水英樹	安岡正人
		直井英雄	清水昭之	志水英樹	安岡正人
		志水英樹	清水昭之	直井英雄	安岡正人
		寺本隆幸	清水昭之	直井英雄	安岡正人
		直井英雄	清水昭之	志水英樹	鈴木信宏
		寺本隆幸	清水昭之	寺本隆幸	鈴木信宏
		寺本隆幸	清水昭之	寺本隆幸	松崎育弘
		寺本隆幸	清水昭之	山名善之	松崎育弘
		直井英雄	清水昭之	山名善之	伊藤裕久
		清水昭之	山名善之	直井英雄	伊藤裕久
		清水昭之	山名善之	直井英雄	倉渕　隆
		辻本　誠	山名善之	清水→4/1今本	倉渕　隆
		辻本　誠	山名善之	今本啓一	倉渕　隆
		河野　守	今本啓一	山名善之	栗田　哲
		河野　守	今本啓一	山名善之	栗田　哲
		河野　守	今本啓一	山名善之	佐々木文夫
		坂牛　卓	山名善之	今本啓一	佐々木文夫

2） 歴代学部長・名誉教授・理事・評議員

■学部長・研究科長

工学研究科が出来てからは、工学部･工学研究科では、(第一部) 学部長が研究科長を兼職している(表中＊印)。

学部長・研究科長は、学内の他の補職と同様に、10月交替である。任期中に定年退職することが分かっている教授を、敢えて学部長に選出する慣習があった時代もある。1980～1993年はいずれも4月交替が続いていたが、その後、任期中に退任が分かっている教授を選出することはなくなった。

第一部学部長	自	至
浜田　稔	1962 (昭和37) 年　9月	1968 (昭和43) 年　9月
幸田　彰＊	1974 (昭和49) 年10月	1976 (昭和51) 年　9月
平野道勝＊	1993 (平成　5) 年　4月	1996 (平成　8) 年　9月
真鍋恒博＊	2006 (平成18) 年10月	2009 (平成21) 年　5月

第二部学部長	自	至
杉山英男	1988 (昭和63) 年10月	1991 (平成　3) 年　3月
沖塩荘一郎	1991 (平成　3) 年　4月	1992 (平成　4) 年　9月
直井英雄	2000 (平成12) 年10月	2004 (平成16) 年　9月
寺本隆幸	2004 (平成16) 年10月	2006 (平成18) 年　9月
河野　守	2002 (平成14) 年10月	2014 (平成26) 年　9月

■名誉教授

一般の教授(学長経験者など特別な功労者以外) では、勤続年数(教授20年以上、助教授1/2・講師1/3換算) を満たせば名誉教授に推薦できるが、2001(平成13) 年に規定が改正されるまでは、専任教授を辞めてからも授業などの大学との関係がある間は、名誉教授の称号は与えられなかった。したがって、2000 (平成12) 年以前の名誉教授の数はさほど多くない。

また、あくまで学科の推薦があっての授与であるため、現役教員の交替で以前の事が分からなくなって、退任後長く授与されないケースもあった。現在では専任扱いが終わればすぐに名誉教授に推薦できるので、忘れられる危険性は減ったものの、今後も同じ方式で行く場合、推薦もれのおそれが無くなった訳ではない。

	事由	授与年月日
武井正昭	1	1995 (平成　7) 年　4月　1日
森脇哲男	1	1998 (平成10) 年　4月　1日
沖塩荘一郎	2	2002 (平成14) 年　3月25日
井口洋佑	1	2002 (平成14) 年　9月30日
平野道勝	1	2002 (平成14) 年　9月30日
鈴木信宏	1	2007 (平成19) 年 11月　8日
松崎育弘	1	2008 (平成20) 年 11月13日
寺本隆幸	2	2009 (平成21) 年 11月12日
直井英雄	1	2012 (平成24) 年 11月　8日

■理事

学校法人の理事会は (この50年間、理事会としては第4～20期では) 11～16名で構成されて来た。評議員の互選で選出されるほか、役職指定の理事もある。第5期に浜田教授が理事に就任して以来、工学部教授から選出される理事は各期とも1～2名であった。

	期	自	至
浜田　稔	5～7	1963 (昭和38) 年12月	1972 (昭和47) 年12月
直井英雄	19・20	2005 (平成17) 年12月	2012 (平成24) 年12月

■評議員

評議員は半数が学内から、半数が同窓からの選出で、学内からは母体となる集団 (学部等) から選挙で選ばれる。この他に評議員と理事会からの指名もある。評議員の役割は、その中から理事が選出されることと、理事会の決定事項に (覆す事はできないが) 同意することである。初期には大学の運営は理学部主体だからと、工学部教員はあまり興味を持っていなかったが、工学部の存在が次第に評価されるようになり、大学運営にも関与するようになって来た。下表のようには建築学科教授のほか、建築学科同窓生からの選出者もある。任期は理事と同じで、従来は3年であったが、2008 (平成20) 年から4年になった。

	期	自	至
浜田　稔	5～ 8	1963 (昭和38) 年12月	1975 (昭和50) 年12月
井口洋佑	9	1975 (昭和50) 年12月	1978 (昭和53) 年12月
	12・13	1984 (昭和59) 年12月	1990 (平成　2) 年12月
平野道勝	15	1993 (平成　5) 年12月	1996 (平成　8) 年12月
直井英雄	17～20	1999 (平成11) 年12月	2012 (平成24) 年12月
石橋利彦	17	1999 (平成11) 年12月	2002 (平成14) 年12月
真鍋恒博	18～20	2002 (平成14) 年12月	2012 (平成24) 年12月
辻本　誠	20	2008 (平成20) 年12月	2012 (平成24) 年12月
倉渕　隆	21	2012 (平成24) 年11月	(在任中)
石神一郎	21	2012 (平成24) 年12月	(在任中)